

NO. 14
March '93

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

ウェルズリ大学女性研究センターの紹介

城崎 進

「学報」103号に報告したように、私は1991年11月にアメリカ合衆国に出張した。神戸カレッジ・コーポレーション (KCC) の総会に出席するためであったが、折角の訪米の機会なので、幾つかの名門女子大学を訪問した。そのうちのひとつがマサチューセッツ州のウェルズリ大学で、学長、教務部長、日本語学科の教員および学生達と面談したほか、女性研究センター (Center for Research on Women) を訪れて、スーザン・ベイリー所長から説明を受け、幾つかの資料も頂いた。このセンターのことを簡単に報告したい。

ウェルズリ大学の女性研究センターは、1974年にカーネギー財団の寄付によって創設された。センターの建物は、所長室、事務室、会議室、研究室、図書・資料室、宿泊室などを含む十数室から成る、シーヴァ・ハウスと呼ばれる三層の堂々たる独立家屋である。現在は学長を長とする監査委員会によって運営され、42名の男女所員を擁し、年間予算は150万ドルである。その経費は、政府機関、諸財団・基金および個人からの寄付によって賄われている。これによって30以上の研究およびプロジェクト事業が進行中であり、また幾つもの海外からの自費での研究グループが参加している。

研究所は、女性の教育、雇用、家庭生活に関する政策追求の研究を行い、特に有色女性に深い関心をおいている。その研究と事業は、性的平等、教科改変、育児、母子関係、異性間問題など広汎にわたっている。研究所は、これらの成果を、百数十冊にのぼる“Working Papers Series”として刊行し、隔年の“Research Report”と題するニュースレターを出し、また書評紙“The Women’s Review of Books”も出版している。

その他のプログラムとしては、毎年“Daughters and Mothers Colloquium”を主催し、またそこで研究員や客員研究者が進行中の業績を報告する“Luncheon Seminars”を後援している。さらに、研究所員の著書の出版、学術誌や一般雑誌への定期的な論文寄稿、研究成果の新聞雑誌、ラジオ、テレビなどによる報道がなされている。

以上の女性研究センターと関連して、ウェルズリ大学の正規学科としての女性学専攻のことを紹介しておきたい。この専攻の目的は、人文科学、自然科学、社会科学に反映されている女性の経験についての総合研究である。

そこでは、男女に関する新しい知的枠組みの理解、また異なる文化や時代における性差経験の知識が追求される。この専攻の中核となる科目は、“Introduction to Women’s Studies,” “Women in Contemporary Society”であるが、その他の興味深い科目名を大学要覧の中から幾つか拾ってみよう。“Feminism and the Environment,” “Women, Peace and Protest: Cross-Cultural Visions of Women’s Actions,” “Women’s Lives through Oral History,” “Asian Women in America”。以下はセミナーの題目、“The Politics of Caring,” “Topics in Gender, Ethnicity and Race,” “Women, Social Policy and the States,” “History and Politics of Sexuality in the United States,” “American Health Care History in Gender, Race and Class Perspective,” “Twentieth-Century Feminist Movements in the First and Third World,” などである。

米国の名門女子大学を範として創設された神戸女学院大学が「女性学インスティテュート」を有していることは喜びであり、さらに一昨年は「AWI (The Asian Women’s Institute: アジア女性研究所) 会議」を会場校として招聘し得たことは非常な誇りでもある。インスティテュートと本学の女性学の、一層の充実と発展を願うものである。(理事長、院長)

中国植林ツアー体験記

加茂 わかな

「この埃っぽさは、一体何なんだ。」最初北京に降り立った時から、帰国するまでの12日間、毎日一度はそう感じた。昨年の夏、緑化を中心に運営しているNGOの中国緑化協力団員として中国に滞在した時のことである。

北京に着いたその日のうちに寝台車で私たち12人は大同へ向かった。目指すは山西省^{山西省}渾源县。このNGOが集中的に緑化協力を進めてゆこうとする所で、植樹に関する様々な条件が良しとされている。ここでの植樹作業と現在の植樹状況の調査が、団の目的である。

車中、私は今までに愛した中国映画のあらゆる風景を夢見ながら到着を待っていた。澄みきった空に映える月、平地を撫でる風の景色を…。しかし、やはり映画は映画でしかなかったのであろうか。作業地である田舎に着いても、視界を遮る埃や煙から逃れることはできずにいた。

炭鉱が豊富な地域だからとはいえ…。そこで私たちはいきなり煤煙公害の問題を目のあたりにさせられた。これを二酸化硫黄や亜硫酸ガスにまで広げて考えると事態はかなり深刻になる。一昨年に同じような(いわゆる)ボランティアツアーで行ったタイ東北部の静かな農村風景を想像していたせいか、私はここでの現状に驚き、とにかく澄んだ空気を切望した。

植樹活動は、団員の人数が少なく作業量としては微々たるものであったものの一応無事に行われ、何よりも私には地元の人々と一緒に作業できたことが嬉しく思えた。幾度か、林業局長の説明を受けたり、以前からの実験地を見る機会があったが、省としても、植樹は比較的順調に進められていることが分かる。この県緑化事業は、後世代のために、社会的効果や経済的効果、加えて生態的効果という点を考慮した上で国策として実施されている。やはり農民の植林意欲が高いのが、緑化成熟の大きな要因であろう。これからの中国の経済成長に伴い、安定は難しいかもしれないが、聞く限りは期待させてくれるものがある。

また、植樹作業の合間を縫って、農家や学校も見せていただいたが、確かにここ渾源には私が(勝手に)期待していた、人の顔があった。外国人はめったに入れない所であったせいか、初め彼らが私たちを見る目はまさに動物園で珍獣を見るかのようなだった。しかし、事情を知ると心よく受け入れてもらえ、至る所で目にする笑顔のおかげで、過度に心配することもなくなり、彼らの生き生きとした姿を胸に、北京へ戻る日を迎えることができた。都心部での喧騒におののいていた私には、ここでの数日間はとても貴重なものとなった。ただ、こんなに都心部から離れた所でも、かなり年を召した人が日本語で話しかけてこられることが時折あり、さすがに胸が痛くなる。

過去において日本がかけた迷惑を、今度はこちらが植林することで、少しでも埋め合わせたいとあって団に参加された人もいたが、確かにこういった形で永く協力を



植林作業風景

続けてゆけたらと感じた。植林という活動だけ見ると、他の地球環境運動同様に時として思いもよらない弊害を生むことがあるとされているが、私は方法を間違わない限りは、続けてゆきたいと思う。行動するのが何よりも先決だとは思えないが、創造性に欠ける私にとって、実際に行き、全身で感じたものは後で考える一つの機会になったことは事実である。そのような意味でもこの12日間は、十二分に内容のあるものだったと確信している。

(総合文化学科2 回生)

「やぎの会」に入りませんか？

岩 森 千 明

「この世の中、無駄が多すぎる！」そう思ったことはありませんか？ 環境問題に関心はある、でも実際何をしたらいいのか分からない、そういう人は是非「やぎの会」に入ることをお勧めします。「やぎの会」は身近なところから環境問題を考えよう、という学生有志の集まりです。昨年2月に発足したばかりですが、いいアイデアはどんどん取り入れてより良い会を作っていこう、という活気あふれる集まりです。

ここで、去年一年間の私たちの活動を紹介したいと思います。

まず最初に、身近にできる環境保護として牛乳パック・古紙の回収を始めました。資源の再利用によって森林保護ができ、紙ゴミの減量にも繋がる、との考えから今も続けています。一週間で回収箱は一杯になり、ゴミの減量という点ではかなり成果があるようです。

5月のバザーでは、再生紙利用商品の販売をしました。「回収だけでは本当のリサイクルにはなりません！」のうたい文句を掲げての販売。その理解があつてか、ほとんど売り切れました。好評だったため、夏休み前にもリサイクル製品の予約販売を行いました。

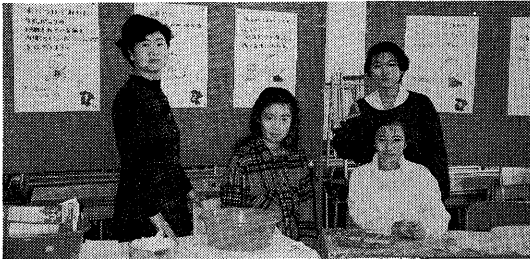
学祭では、少しでも多くの人に環境問題を意識してもらおうと「牛乳パックで作る手すき葉書体験コーナー」を設けました。また、私たちのちょっとした努力で環境保護ができることを具体的に提案し、パンフレットを配布しました。

他に、毎週一回勉強会を実施しています。もっと知識を増やそう、大きな視点で環境問題を考えようと、これまで古紙、食品汚染、植林の実態などについての発表、話し合いを持ちました。リサイクル運動は間違っているという意見も最近聞かれ、その賛否についても討議しました。その時に私たちが話し合ったことを紹介しましょう。

回収運動が活発になると、再生紙が余ってくるなど、確かにリサイクル運動には問題があります。しかし、それが人々の環境問題に対する意識を少しでも変えられたことは大変意義のあることだと思います。社会の底辺の小さな運動ですが、それがなければ社会全体も動きません。私たちが今しなければならぬこと、それは、この社会の中で、学生として何が出来るかを考えていくことなのです。

あなたも私たちと一緒に環境問題を考えませんか。

(総合文化学科3年生)



やぎの会 大学祭にて

やぎの会からのお願い&お知らせ

◎回収箱に入れる際、次の注意は必ず守って下さい。

＜牛乳パックの場合＞

- 中を洗って、乾かして、切り開いてから持って来て下さい。
- 牛乳パック以外のものは回収箱へ入れないで下さい。(持ってきたときの輪ゴム、袋などは取っておいて下さい)
- 中が銀色のパックは再生できないので入れないで下さい。

＜古紙の場合＞

- ホッチキス・セロテープ・クリップなどは必ずはずしてから入れて下さい。
- 色のついた紙、表面がテクテクの紙(パンフレット、ポスター等)は入れないで下さい。

古紙・牛乳パックの回収は皆さんの協力がなければ成り立ちません。ご協力よろしく申し上げます。

なお、回収箱は現在学生ロッカールームに置いていますが、ロッカー室模様替のため、4月より移動する予定です。設置場所が決定すれば、掲示等にてお知らせしますので、引きつづきご利用下さい。

◎毎週金曜日の昼休み、D-302で集まりを持っています。少しでも興味ある方は一度のぞきにきて下さい。(または随時、女性学インスティテュート(D-303)まで。)何回生でも歓迎です。また、環境問題に関することでのアイデア、提案、要望などありましたら是非教えて下さい。

性の「物語」

難波江 和 英

このニューズレターのために原稿を書くことになり、指定された題目を見て驚いた。

「男たちよ、女たちよ」。さらに御丁寧にも、「『男たちよ』または『女たちよ』でも結構です」とある。いまのぼくには、「男たち」にむかって発する言葉もなければ、「女たち」にむかって発する言葉もない。少し格好をつけて言えば、ぼくの言葉は「人間たち」にむかって発せられる。もうそろそろ「男」にも「女」にもこだわるのはよそう。そのこだわりを捨てないかぎり、「人間たち」にむかって発せられる言葉も生まれてこないし、どうして「男たち」や「女たち」に語りかける言葉がいまなお必要とされているのかも理解できないからだ。

無論、ここで言う「男」や「女」とは、性別を意味しない。時代や社会によって構築された性差のことである。それをsexに対してgenderという人もある。ぼくはそれを性の「物語」と呼ぶ。「男なのだから…」とか「女なのだから…」という表現は、その最たる例である。この表現のいずれもが、紋切型の見方に立った男女観である。多くの人々は、それを問題にするかもしれない。しかし、性の「物語」で本当に恐ろしいのは、紋切型の思考形式ではなく、意識することもなく、当然のこととして紋切型の思考を受け入れてしまっている事態である。

たとえば、女はスカートをはければ、ズボンをはける。ところが、男はズボンをはいても、スカートをはかない。それはなぜか、といぶかる人もあまりない。1849年にMrs. Bloomerがブルーマー型ズボンを考案したとき、世の男たちはその種の衣服を身につけた女たちを「怪物」扱いした。その屈辱に耐えた女たちの闘いがなければ、いま女たちがズボンをはくということもなかっただろう。それに対して、男たちは、自分たちが「怪物」扱いしてきた女たちの衣服を身にまとえなかった。女たちはスカートをはき、かつズボンをはくという「自由」を得た。いま男たちがスカートをはけないのは、その意味では「不自由」なことである。しかし、現在の性の「物語」では、その「不自由」は語られない。むしろ、男たちがスカートをはけない「不自由」を「変態」と呼ぶことによって、その「不自由」は隠蔽されている。現在の性の「物語」に組みこまれているからくりの一端がそこにある。そのからくりを自覚することから始めよう。そして「人間たち」にむかって発せられる言葉を獲得しよう。

(英文学科助教授)

1992年度年間活動報告

I 講演会

第1回 1992年6月25日

「ガラスの靴をはきますか？」(対談)

山口典子氏(堺市女性団体連絡協議会事務局長)

C. プロデリック氏

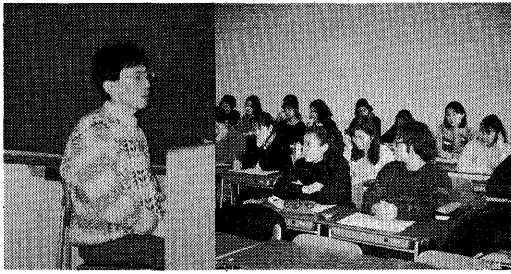
(神戸女学院大学文学部英文学科教授)

第2回 1993年1月28日

「大学生のためのフェミニズム理論」

難波江和英氏

(神戸女学院大学文学部英文学科助教授)



II 研究助成

「アメリカ文学に見る『聖母子像』—黒い聖母たち」
 (“The Iconography of the Madonna and the American Imagination (2)—Roxana’s Daughters”)

別府恵子

「二体のヴィーナス」

浜下昌宏

「Sense and Sensibility—時代精神と女達の価値観—」

平井雅子

「坂上郎女の悲哀—女として母として—」

北島 徹

「不在の子宮—メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』を読む—」

渡部 充

III 学会等出張補助

* 婦人問題企画推進有識者会議情報委員会報告会

(東京都: 1992年10月22日) に出席。 別府恵子

IV 出版物

「ニュースレター」特別号

特集: '91年度AWI(The Asian Women's Institute: アジア女性研究所) 教員・学生交換プログラムに参加して
 (1992年6月30日発行)

『女性学評論』7号 特集: 女性と文学

(1993年3月31日発行予定)

V その他

* 学生の活動に対する補助: 「やぎの会」(環境問題を考える会)の諸活動に対し支援を行った。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っております。

◎開室時間 月～金 8:30～16:30

(但し、11:45～12:45は除く。)

* 夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。

◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生

◎蔵書数 図書 和書 約1,300冊

洋書 約 165冊

その他、雑誌・新聞・ビデオ・講演会のテープ、女性団体のニュースレターおよびパンフレットなど。

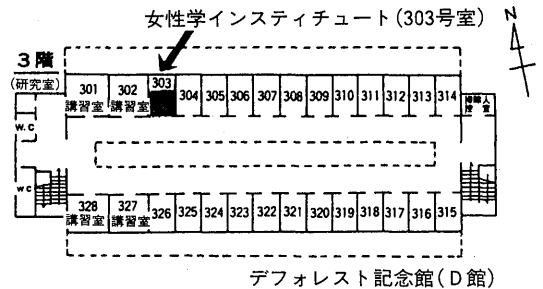
◎収集分野 心理・法律・労働・メディア・人権・女性論・女性史・家族・パートナーシップ・ライフスタイル・性・からだ・環境・文学

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧下さい。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで。

◎検索方法 図書目録カードBOXを当インスティテュートおよび図書館新館1階に設置しています。ぜひ、ご活用ください。



■次回講演会のお知らせ

4月6日(火) 14:00～ 会議室

アリス・ケスラ=ハリス博士

(ラトガース大学女性学研究所ディレクター)

「アメリカ社会と女性の役割

—雇用賃金格差の変遷を中心に— <通訳つき>

1992年度女性学インスティテュート編集委員

風呂本淳子、本城智子(委員長)、真栄平房昭、丸島令子、山内祥史(ABC順)

編集・発行: 神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545